

対談

## 幼児の教育—それは樹木を 育てるようなもの

徳川 宗 敬

周 郷 博

生と同じ水戸の方で、徳川先生のご父君がイタリー公使でいらした明治二十年ごろ、一緒にイタリーへお連れになり、女史はあちらでいろいろ研究されて、帰国後水戸で幼稚園を始められたのだそうです。そのころ徳川先生はよくその豊田女史のひざの上で遊ばれたとか……。

二月にしては暖かいよく晴れた日の午後、もみじ幼稚園園長の徳川宗敬先生と周郷博先生をかこんで、もみじ幼稚園と学習院幼稚園の先生方十七名でなごやかな集りがありました。実は、徳川先生は

まれたことがおありで、「徳川さんという方に会ってみたかった」とこのことで、当日司会役の学習院の高木先生流にえば、「おじいさま(失礼同志のお見合い)のような形で始まりました。

以前から一度周郷先生とお会いになりたいとのご希望をおもちだったとか、一方周郷先生の方も、徳川先生の奥さまが終戦後、水戸のいなかで農業生活にお入りになったということを週刊誌か何かで読

まず最初に徳川先生の方から、「幼児教育とのかかわり」ということで、「しいていえば」と日本の幼稚園の創始者ともしられる豊田英雄女史とのかかわりをお話しになりました。豊田女史は徳川先

た八年前に、「これはまた大間違い」とご自身はおっしゃいますが、伊勢神宮の大宮司になられ、今は伊勢と東京の間を始終、行ったり来たりのご生活と、うかがいました。

「林業」ということで、「ぼくは今、ますます、木とか、そういう性質のものに

人間以上の親しさを感じている”と周郷先生は体をのり出さんばかりで、土いじりの話、木を育てる話、つきつきと話題はつきまませんでした。

### ☆ 土いじり

徳川 私はこんな経歴なものですからいつも父兄の人にも話すのですが、やはり幼稚園の教育は木を育てるのと同じだと思ふのです。同じ木を育てるのでも、幼稚園の教育は、根を育てることだと思つているわけです。ですから文字なんかも教えません。というのは、根を作るための教育ですから、あまり早く葉っぱを作つては困る、そんな素人考えでやつておりますので、専門的なことは先生からうかがいたいと思ひます。

周郷 ぼくは、“先生”っていったらいいのか、“徳川さん”ていったらいいのか(笑い)……会つて話をしたといわ

れた時に、直感みたいなもので、“木を育てる”……ぼくもそれに似たようなことを考えてるんじゃないかというふうにお感じになっておられるんじゃないかと思ひました。それで実は楽しみにして、今日うかがいました。そして、ぼくの思ひ出の中にある一つのことをききたいなあと思つていました。戦後十年ぐらいたつたでしょうか、週刊誌か何かに、徳川さんの奥さんが水戸のいなかの方で農業をやっているという……あれは何に出たんでしょう、やはり週刊誌ですか？

徳川 はい、週刊誌に何度か出ました。  
周郷 そしてぼくはその時から、いつかその人に会つてみたいなあ、と思つていて、いつのまにか忘れていたんですけれどいよいよ十五年以上すぎて……(笑い)

人間にはよくそういうこと、あります

ね。“あの人に会つてみたいな”と思うんですけれど、忘れていて、ある時偶然その機会がくるという……

徳川 あの当時百姓をやりましたね、大抵ほかの人はやめてしまいましたが私のところは幸いに息子夫婦があとをついでおります。彼は学生時代に体をこわしまして、私どもが農業をやっているところへきている内に、とうとう本百姓になつてしまいました。ぜんそく持ちで、健康の上からも大学へ行くよりはというこゝとで、今もつて、牛を十何頭かもちまして酪農をやっております。あの当時やっていた人は皆やめてしまったのですが、今まだやっているのはよっぽど馬鹿か……

周郷 “よっぽど馬鹿”というのはい言葉ですわね。(笑い)そうじゃなくちゃいけませんね。戦後引揚げてきた人や何かが一時的に、農業へいったわけで

す。しかし世の中がちょっと変われば、農業なんて手段にすぎない、つまりふんだりけつたりです。

徳川 ま、家内はやり通したわけです。

周郷 ぼくは……一方では都会に対して劣等感をもっていましたけれど、何となく大地とか川とか林とかいうものが好きでした。今は渋沢にいますが、やっぱり川はきれいであってほしいし、他人の山でも掃除したくなるしね。一昨年停年になってから、畠を借りていろいろ作ったり、人の畠の麦ふみなんかもしています。

土いじりをやっている、さっきいわれた、根が大切だというのがまずわかりますね。農業や何かで地力が弱くなっているとありますので、山へ行つて、五月ごろには草刈りもしなきゃなりませんし、便所もくまなきゃなりません。そし

て、いよいよ芽が出てきますね、だんだんのびてきて、若者になってきたというような感じ、この時の色と姿、これが変になつちゃうとぼくの神経までガクッときますし、よくなつてきた時は、非常にうれいんです。ちよつと、説明つかないんですけれど……そういうふうになりました。ぼくはずい分おそく始めましたけれど。

徳川 停年におなりになつてからですか？

周郷 ええ。百姓してるといろいろなことを考えますね。ですから、今度本を読むとよくわかるんです。本を読んだだけで何かがわかるわけじゃないんです。

体で、こうじゃないか、と考えていると、本を読んだ時に、パッとわかつてくるんです。言葉や文字の世界と違つて、木とか水とか作物とか山羊とかを相手にした世界、となると普通にいう「責任」と

違つてくるわけです。社会的責任とは違つて、やらなきゃならないことをやりますね。しかし自分に責任を問うているのは人ではなくて「自分」、あるいは相手の「作物」なんです。こういうふうに考えていくと、考への強力性というか、脳が空転しないうすむ。本を読んでも、その表面だけじゃなく、その根にあたるどころまでわかる。ぼくはこの年になつて、今までの大学の生活では得られなかつたことがやれるようになったと思ひます。

### ☆ 山の捨て子

徳川 じゃあ、山もおもちですか？

周郷 山は、ひとの山です。(笑い)  
このごろは山もたきぎも取りませんし、柿の畠なんかも植えつ放しではつたらかしてしょう？ この春はずい分剪定きりしたり、下草を刈つたり……でも今年は一ひと

つ柿をたくさんならせようと思つて……

……。ひとの家の柿ですけれどね。(笑い)

徳川 実際、自分でそういうことをやるのは、楽しいですよ。

周郷 からだも、もちろん健康です。

時々木から落ちそうになったりしますけれど。(笑い)

徳川 よくわかります、私も開墾地へ入りますと、大きな杉の木があります、そこへ筑波おろしが吹いて、杉の種がち

ょうどだ円形に落ちます。ところがそこは竹やぶでして、うちやっておくとその杉の稚木は枯れてしまいます。私は百

姓の方は役に立たないんですけれど、このやぶ掃除をしました。あんまり一生懸命やっちはちの巢をかいて、はちがペー

ッときて、さされたりしました。

周郷 ぼくもやぶの中からいろいろ集めてきて植えます。植木やの木なんていうのは、植木や用にできて不自然で

す。

徳川 今の都会の子どもみたいですね。な。

周郷 そういうような木とか、川に捨てられている木とか、そういうような木の捨て子たちを集めてきて育てていま

す。

徳川 そういふのは気持ちいいでしょう？

周郷 それから、ちゃんと植え直すとまたいいものです。くるみの木を二本山からかついできて植えましたが、玄關のところに植えた方は、初めきずだらけで

だめかと思つたんです、しかし植えかえたせいでしょうか、今は、とっても勢い

がいいんです。若い郵便配達の人が、くるみの茂っているところをくぐってくる

のが大いに気に入っているらしくて(笑い)……それは彼のいってることですわ

“くるみが、よくなりましたねー”

そのひとこと……彼が好きだつていうことがよくわかります。

徳川 さきほどの杉の稚木ですね、”かり出し”といいますが、この”かり出し”をしますとだんだんのびます。それが今もう見上げるようになりました。

本数にしたらわずか五十本ぐらいですが……。

開墾していましたが昭和二十二、三年ごろですから大体二十五、六年たったわけです。やはり自分が育てた、ということでもかわいいです。

周郷 本場に、山にはいろいろ生えています。やっとな枯れないで大きくなつて

やぶの中、ちよつと見ちゃわからないようなところで山桜が咲いていたんです。こ

ういうのも持って帰って植えました。まるで捨て子の収容所です。(笑い)

徳川 幼稚園の教育もそんなものじゃ

ないですか。能力がないように見える子どもでも、その子のもっているものをひき出してやらなければいけないと思います。

## ☆ 仮説

周郷 鼻をしていろいろなものがわかるっていうのは、終点にあたる知識がわかるのじゃなくて、こういうものじゃないかな、という仮説ですね。だから、死んだ知識じゃないわけです。多分こうじゃないかなという仮説がいろいろわかってくるんです。本読んだりなんかしていても、ぼくの中に仮説ができてるもんだから、読んでわかる、という喜びが深いわけです。別に植物のことを読むわけじゃなくて、人間のことを読んでいても……です。多岐にわたるいろいろなものを読んで、深くよくわかるんです。

徳川 先生方も、子どもを扱っていらして、仮説っていうか、そういうものが何かあるでしょうね。

周郷 やっぱりぼくはね……仮説っていうのは客観的じゃないですよ。しかし、各人が仮説みたいな、仮説にあたるようなものをもっていないと、知識はわからないんじゃないかと思います。それは、その人がつかんだものです。世界観といつてもいいと思うけれども。

それを全然抜きで、お勉強してもしょうがない、と思うんですがね。

徳川 しかしまあ、幼稚園の先生は、それをやってるんじゃないですか？

周郷 非常にすぐれた科学者（今ぼくが一生懸命なのはコンラッド・ローレンツなんです）、あらゆる科学者は自分で仮説みたいなものをつかんでいると思います。仮説をなせつかんだかという、ニュートンみたいに、偶然というの

もあるかもしれない。また、宗教的なものもあるかもしれない。つまり、宗教的なものなしには生きられませんからね。それは仮説を作らせる一つの根拠になっているかもしれません。

そういうように、仮説がなければ、出発点としての科学はおこり得ないのじゃないか、あれこれみんな調べて知識をよせてみたって科学にはなりません。調査じゃないんです。仮説がなきゃ、調査は意味がないです。

そういう意味で、ぼくは農業をやったよかったです。農（業）をやっているっていうのはちょっと適当じゃないんです、ぼくは「農」をやっているっていうんです。（笑い）

徳川 私がいなかでやっているのは、酪農じゃなくて「酪」ですな。（笑い）  
実際は、損をしているんです。

周郷 植物のほかに、動物を飼うと、

やっぱり人間は植物と動物と一緒に過  
してきたんですから、これがないと、人  
間が人間になるのにも、どこか欠けち  
うわけですね。

徳川 動物のお話が出ましたが、私の  
幼稚園は、よくお前のところは動物園だ  
などといわれるくらい、たくさんいろい  
ろなものを飼ってます、やっぱり子ども  
も、あれらを見ますと、何か得るもの  
があるだろうと思いますね。

周郷 情緒障害とか、自閉症なんてい  
うのはね。動物と話していると、ちゃんと  
話せるようになるんじゃないかと思いま  
す。動物は素直ですからね。やはり話と  
いうのは、そういうのと話していくから  
自然に話せるので、初めから先生なんて  
いうのと話すんじゃないね。(笑い)段階を追  
っていかなきや、無理ですよ。

## ☆ 二十五年先の目標

周郷 前の杉の木のことなんですけれ  
ど、東山魁夷さんはぼくの昔からの友人  
なんです、東山さんは家を建てた時  
に、門から玄関まで、北側に、杉をすー  
っと植えたんです。二十年ぐらいたって  
杉が大きくなった時のことを考えながら  
魁夷さんは植えたんだと思いますね。大  
きな杉の間を通過して玄関に行くなんて、  
いいでしょう？

二十年、幼児教育もそういうことを考  
えた方がいいんじゃないかな。これも仮  
説なんだけれど、二十年先を考えてやる  
方が楽しんじゃないですか？ 大体教育  
っていうのは二十五年ぐらいい先を考え  
なきゃいけないものでしょうね。

徳川 今の子どもが大きくなるころに  
は、日本がどうなるか知りませんが、資  
源がない国ですからどんな苦勞をするか

わかりません。それをしよって立つの  
が、ちょうど今扱ってる子どもなんで  
す。

周郷 今生まれた子が二十五歳、紀元  
二〇〇〇年になった時のことを、いろい  
ろなことを、仮説として考えることはで  
きるわけです。エネルギーなんかでも、  
ウランとか水素核の融合とかね、そんな  
夢のようなことは考えていられないと思  
います。人口は多くなって自然法則的に  
競争しますからね。そういうことは仮説  
としてわかりますね。少なくとも、トイ  
ンビーが日本についていってするように、  
日本人は、よき労働者になるということ  
を、世界の中で考えるべきじゃないか、  
軍事力とか何かでおどかすんじゃないか  
……。

ところがこの線は、教育の中において  
ほとんどゼロですね。よき労働者になる  
ような教育はどこにもありません。〃勞

働者をさげすんでいってはいけません。

本当にいい、体も心もよく使つて、自分の目の利益じゃなく、世界の役に立つ努力を惜しまないということはなくなつてしまいました。二十五年先を考えたら、そういうふうに育てなかつたら、あまり労働するのがいやで、一攫千金みたいなことをやってたらだめです。

徳川 そういう時代が来そうですからね。

周郷 よき労働者になる、そしてよき労働者であるということは、ちゃんと自分でよく使える肉体をもつということですよ。同じように脳というものも、肉体が動けばよく働くようになると思います。肉体ぬきで頭が働くことはいけません。心身両方にわたつて、よき労働者になる、よき労働をして、本当によく考える(利己的でなく)と、心もすがすがしくなります。それが現実のわれわれの世

界では、全部抜けおちています。

徳川 今の教育の目標は、サラリーマンになって、高い月給をとるようになるということが、大体的目的じゃないでしょうか、

周郷 そうなんです。それがめあてで、それが幼児まで「さがつてきてる」んです。

よき労働者になる、その前に、土遊びとか、動物の世話、作物を育てるといふのも子どもには(そのままでは無理ですけど)遊びとして大事です。子どもの遊びっていうのは、大人の遊び以上に労働ですね。大人は、どんなに労働者でも、たとえ職人であってもやつてる労働は一つの目的をもっています。子どもの遊びっていうのは、そういうわくもありません。そして、一生懸命遊んでおれば、大人の労働よりもっと完全な労働者です。そういう遊びを子どもの時

にやっておかなければいけません。

でも、子どもが遊ばなくなつたんですよ。遊ぶ場所もないんです。

ヨーロッパの人たちは、「職人」という意味での「労働」に対する熱心さをもっています。日本は非常に急速にサラリーマンになってしまいました。

徳川 伊勢のご遷宮が二十年ごとにありますね。これは一般の方はおやしるだけ建てると思つていらつしゃいますが、おやしるはもちろん、神さまの調度品も全部新しくするわけです。刀もありますしいろいろあります。しかし、それをやる職人がだんだんなくなってきたんです。まだ今度はできましたが、このつぎになつたらなくなるんじゃないでしょうか。ということは、今お話し「よき労働者」がなくなつたということです。同じ織り物一つするのでも、商売を離れた、技術を習得するそういう人がなくな

ってきたんですね。

周郷 商売をぬきにしたら、その職人の仕事をすること自体がむくいだという、それがお札なのだということですね。

徳川 ま、そういうことを今の子どもにうえつけるといふのは……

周郷 これほど変わってしまったと、どこでどうしていいかわからないんです。

徳川 日本人は、ともかく能力のある国民ですからね、そう悲観はしていませんが、どこかで、切りかえる必要のあるところまでいったら、切りかえるのじゃないかと思っっていますけれど……。

周郷 仕事をすることがむくいであるということ、政治家にもあっていいんじゃないかと思っます。結果がどうだとか、得票がどうかじゃなくて、この政治をやるということがむくいである、これは学校の教師でも同じだと思っます。これは手段で、いつもほかのことを考え

ている、なんていうのはよくないです。

徳川 でも、幼稚園の先生はいろいろ苦労も多いですが、それでもって生きがいを感じているんじゃないでしょうかね。

周郷 農業、じゃない農(笑)いはね、それ自体むくいられるんです。そして疲れを忘れて働いちゃうんです。あまり手をかけすぎてもいけないんだけど、日が暮れても働いちゃうんです、母親なんていうのも、子どもが小さいうちは大体そんなものでしたね。疲れなんか感じないでやってきたわけです。疲れを意識しすぎるんだな、このごろは。

人間としては、高級な仕事ですよ、農をやることも、生まれた子どもを育てることも、普通の子、とももですけれど、障害をもった子どもにかかわっていると、いやおうなしに学ぶことになりますよ。何かそういうふうに、農をやるとか、山か

らとってきた実生の杉を育てる喜びなんというのは、人間として基本的なものじゃないかと思っますね。

このあと、徳川先生の幼稚園の先生方が昨年伊勢へ行かれて植林をなさったのお話から、この松は二百年たつとご用材になるという非常に雄大な楽しみに話されました。またその植林にあたって、根はまるまるとままだはいけない、ひろげて、それをふんで、いじめるほどに固めなければいけない。それは子育ての親の心と同じだといわれたと、先生方からご発言がありました。そのあと、かわかないように枯葉で根元をおおっておくこともすべて幼児教育に通じるものだとこのことで、お二人は大いに相づちをうっていらっしました。



周郷 今、二百年という話が出ましたけれど、今は時間というものが非常に早くなりますね。昔の人は、二百年先を見こして植林をしたと思います。孫子の代にということ……。しかし、二百年というのとは考えようがないかもしれない、また、二百年後、自分が死んでからあとはどうでもいいって言うことはないと思います。それは、実体としてあるわけです。たとえば、地球が変なふうになるにしても、やはり二百年あとというものを、自分一個の人間の中に含んで生きていくべきです。“あさつてご馳走を食べよう”ということしか考えない人より上等な人だと思います。(笑)

逆に、人間は子どもころのことを意外に覚えているものだということが、今でもよく幼稚園の卒業生が訪ねてきたり、集りをするとの徳川先生の

お話があり、今ふうの長い髪に赤いズボンの男の子などが来てびっくりされたとか。

#### ☆ 記憶——生きている経験

周郷 今、徳川さんは“忘れない”といわれましたね。やはり六歳くらいまでのことは、普通は思い出せないと思えます。世間普通の、知っているという意味で思い出せるのはそのあとなんです。これはうすいでしょ？ その前は、忘れちゃったようなんですけど、しかしその方が本当の思い出せることなんです。知識じゃないんです。あとで“覚えた”っていうのは、大脳皮質のところへ記憶したということですよ。それ以前の方が本当の記憶です。

徳川 身につけている……。

周郷 そうです。その人の人格と不可分な記憶です。その人の、見る目と、感

じる心と一緒になるものですから、記憶だけとして分離できないものです。そこが重要だと思います。

デュボスが“生きている経験”といっているのは、“知らないで、いつの間にかわかった”ことじゃないかな。子どもが、先生やお母さんに笑いかけられてホッとする。こういうのは、その子もっている遺伝子の何かと、外からの経験がぶつかったものです。それが“生きている経験”でそれ以外にその場かぎりの経験は、ずい分あるわけです。自分で、“これだな”と思う。この経験で“自分”になる、そういう経験だと思えます。やっぱり、一人の人間の一生を支配するのは、この“生きている経験”じゃないでしょうかね。

徳川 それは尊いものですね。

向島のお生れで、幼稚園は両国の園

技館の近くの江東幼稚園。よく遊ばれた国技館のそばのいちょうが忘れられないとおっしゃいました。もみじ幼稚園には大きなメタセコイアがそびえているようで、周郷先生も、木というのは本当に忘れられないものだと話され、メタセコイアのさし木をおもいになるお話にまで発展し、あと五年ぐらいは死ぬわけにいかないな”には一同大笑いたしました。

このあと周郷先生は奈良でいちょうの絵を画いておられる画家不染(鉄)先生のお話をされ、その方は自分の小さいころの記憶の中のいちょうを画かれるので、見なくても画ける、そして非常にいい画だということでした。東山魁夷さんの画の中にも、幼児のころの思い出を画かれたものがたくさんある。それだからただ表面的なもの画いたのではなくて、幼児の時から求め

ていたものがこめられているので、あれだけ見る人の心をつつ力があるのだ、と話されました。

### ☆ 今の幼児教育―男性の役割

周郷 こういうことを考えると、今の日本の幼児の教育つていうのは、今のよいうな状態でいいのかどうか……何か、もっと大事なことがあるんじゃないか、という気がするんです。

音楽とか何とか、一種の天才教育、あれはあれで、大勢の中からはいい子もできます、でも犠牲者も多い、ということと考えるべきです。しかし考え方をかえると、どの子にもいい教育、なんてものはないもので、どんなやり方でもやはり犠牲者はあるんです。どの子もみんな幸せになります、なんていうのはうそですね。

どのくらい幸せになるか、という条件

としては、社会全体のふん囲気が大事なんだと思います。社会全体が、じっとして怠けてはおれない、皆が本当に創造的に生きましょ、そういうふん囲気になつてくれれば犠牲者も少なくなります。自分のエゴなんか考えてるひまがなくなる。そういうふん囲気が大切です。

徳川 残念ながら、そういうふん囲気がなかなかないですね。しかし、幼稚園と家庭というのがうまく結ばれれば、多少よくなるんじゃないでしょうか。

周郷 そうです。やはり家庭を引きこむことが必要です。そしてもうひとつ、女と男との違いがあるんです。男性がもうちょっと(ということとは男性保育者がほしいということではなしに)力を出してほしいと思います。男性は、先ほど徳川さんもふられたように、男性の価値というの、女より先を見ている、というところにあるんです。だから、女から見

るとまだるっこく見えるんでしょね。

(笑い)あの人は夢のようなこと考えて……

しかし、それが男性なんです。そのことで男と女は助け合っているんです。

徳川 私は自分の娘や息子が幼稚園にお世話になっておりましたころは、一度もうかがったことがないんです。しかし最近父の会などというのがある、けっこうお父さんが出ていらっしやいます。傾向としては悪くないと思えますが……

周郷 そうですね。でも意地悪く考えると、ぼくはそういうところへ出てくるお父さんで、女みたいなお父さんだと思うの。(笑い)もうちょっと男らしい男が出てきてほしいんです。

昔は今と違って、お父さんというのはおソソリティーがあったんですよ。そういうところへ出たんではみっともないということ、出たくても我慢してたんで

す。

## ☆ 大人は大人らしく

これは方々の幼稚園でやっていらっしやることでしようが、もみじ幼稚園でも餅つきをなさって、その時はお父さん方の参加が非常に好評である、ということから、大人が大人のあるべき姿を子どもに見せるということは必要であるし、これが教育なのだと言われましました。大人は、子どもの方ばかり向いて、やるべきことをやらないのはよくない、ということ、そばにいて、ちょっと助言すればいい。その場合、子どもを意識しなくていいのだとお二人そろっておっしゃいました。もみじ幼稚園には日本一小さなお母さんの図書室があって、徳川先生のお考えとしては、まず、お母さんが一生懸命本を読んでいる姿を、子どもに

見せることで効果があるのだということでした。

アメリカでもそういう反省がおこってきたと周郷先生は話されました。今までは子どものきげんをとりすぎてきた、あまりきげんをとりすぎると大人になってやる気がないのでないか、といつて、きょう迫もいけない、そういう意見が多くなってきたそうです。

周郷 大人だから、勇気やほげましを与えることは必要です。しかしきげんをとる必要はありません。

徳川 たしかに、親たちの間にもそういう傾向がありますね。

周郷 ぼくも園長をして、いろいろな経験をしましたが、大人が大人であることが、子どもにとって幸せなのだ、と思います。子どもたちがさわいだからといって「誰が静かにするかな」なんて間接

的なことをいってもだめなんです。(笑い)

大人は大人らしい顔つきをすればいいんです。おどかすというんじゃないんです。そこが難しいんです。おどかす、というのも大人の低級さを現わします。大人が権威をもつていうことは、子どもも求めていることじゃないかなとぼくは思います。

それから、周郷先生が園長時代に園児に、電車の中で「席がない」とぐずる子どもの話をなさって「そういう子どもはここの幼稚園の子じゃない、明日からは乗り物の中では立つように」とおっしゃった時に、本当に子どもが真剣な眼つきをしたことを話されました。そして徳川先生も、昔ベルリンにいらしたころ、あちらの子どもは、大人が乗ってくるすとすつと立って席をゆ

ずつたとおっしゃいました。

周郷 親も悪いですね。ひどい人になると、三歳ぐらいの子どもを靴のまま窓の方に向けてすわらせて、ジュースかなんか飲ませて、「あんた疲れたでしょ？」なんていってる。やつと歩けるようになったんですよ、歩くのは当り前です。今から疲れているんなら生きてるかいがありません。(笑い)「疲れたでしょ？」なんて、大人が暗示にかけてるんです。言葉っていうのは、そういう暗示力があるんですから、使う言葉っていうのは大事です。しかも、この世で一番頼りにしている母親がそういうことをいったら、疲れていなくても疲れたような気になります。(笑い)

徳川 たしかにその通りです。

夏休みの前なんか、先生方はお約束、帽子をかぶりましょうとか何とか、

いろいろいいますね。でもぼくは終始一貫、「紙くずを捨ててはいけない」それだけをいっています。

周郷 ああ、それは本当にいい文句です。捨てちゃいけませんよ。

徳川 ですから「紙くず園長」っていわれるんです。(笑い)

周郷 それをほっておくと、捨てるのが平気になって、その内へへ理屈をつけてまで捨てるようになってっちゃうんです。どうしても捨てるとう気持ちが悪い、という人間がふえれば、ごみはへります。公害も緩和されます。でも、みんな捨てて、しかも、それを悪いとは思っていません。それこそ、そういうことをくり返して教えられた子どもは、二十五年たったら、貴重な人間になるでしょう。もっとも、そういう子は、初期は悩むでしょうね、ほかの人がみんな捨ててるから……。しかしその悩みをもつことも必要で

す。

徳川 悩みばかりじゃなく、誇りももつてしょうから。

### ☆ 子どもの持ち味

このあと、徳川先生から、幼稚園時代には手のつけられないほどのあばれん坊だったのに、小学校、中学校とへて、現在高校生になっている卒業生の話が出ました。彼は自分でも、自分が幼稚園時代そんなにあばれたということが信じられない。今、あばれたいと思わないのは、きつと幼稚園の時に思いきり遊ばせていただいたからだろうといったというお話が出ました。

周郷 今の子どもたちは、遊び場がなく、何かちんまりと生きてますね。それであとになって、変なあばれ方、暴力とか犯罪とかにつながっていくんじゃない

いですかね。そういう意味で自由空間がほしいですね。

徳川 彼は、幼稚園を出て十周年かたって、本当にありがたかったって喜んでるんです。

周郷 まあそりゃ、人間の持ち味っていうのもあって、あばれん坊でない子もいますけれどね。

人間の性質、あばれん坊でもおとなしい子でも、初めは非常に粗野な形でもっているわけです。これを使えばそれがその人の人格になり、それがいい加減に、現われないまままで自然に腐らせていったりすると、だめになるんです。その子の持ち味、あばれん坊は、あばれることで自らを教育して一つの人格にプラスしていったんだと思います。

せっかくここへきて、若い人たちから発言がないのは、ちょっとさびしい気がしますね。でも保育の職場というのは、

女性にとってそれがいい経験になるような、そういう職場であってほしいと思

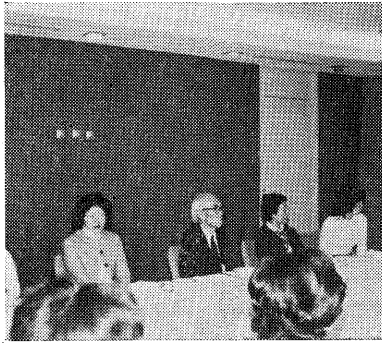
います。俸給の手段ではなく、先生たちの生きがい（神谷美恵子さんのいったような）がもう一つの重要なことなんで、その生きがいもまた、その人一個の問題にとどまらないで、世の中の役に立つ生き

がいになればいけないと思います。

徳川 いろいろ苦しいこともあるでしょうけれど、毎日子どもと一緒にいると、愉快でしょ？（笑）

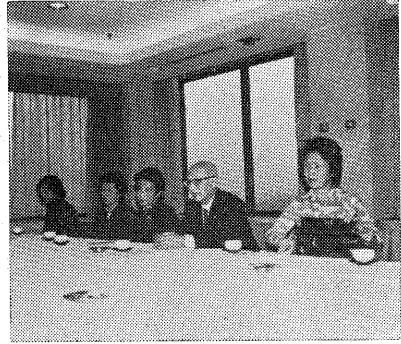
周郷 それが、その「生きた経験」愉快なものになるかどうか、人によっていろいろ違うんじゃないでしょうか。

五年、十年やってれば、だまってたつてそれだけの年月はたっていくんですから、ただ俸給のために十年いた、というよりも、人生を十年いた、という方がいんじゃないでしょうか。大人として、年長者としての持ち味が出てくるこ



周郷先生

おこすこともできないと周郷先生はなげかれ、ガスや電気などと違った本当の火の色の美しさ、それこそ、人類が人類になった時の火の色なのだと話されました。そして徳川先生も、伊勢神宮の毎日の火は、いまだに原始と同じようにしておこされるのだとおっしゃいました。ともかく日本はマッチが多すぎて、ヨーロッパでは喫茶店でもあんなにやたらにマッチをくれないとのお話には一同大笑いでした。そして、



徳川先生

とがいいと思います。きまりきったカリキュラムじゃなくて、予測できなかったことが起こってくるようなことが、生きがいとしては大切です。

一応この辺でできりがついたように見えながら、まだつぎつぎと話題はつきませんでした。殊に、このごろの子どもはマッチもすれない、もちろん火をおこすこともできないと周郷先生はなげかれ、ガスや電気などと違った本当の火の色の美しさ、それこそ、人類が人類になった時の火の色なのだと話されました。そして徳川先生も、伊勢神宮の毎日の火は、いまだに原始と同じようにしておこされるのだとおっしゃいました。ともかく日本はマッチが多すぎて、ヨーロッパでは喫茶店でもあんなにやたらにマッチをくれないとのお話には一同大笑いでした。そして、

日本人は今や養鶏場のにわとりのように（昼間から電気をつけて、夜までコッソコやってい）なってしまうた、とはお二人の共通したご意見でした。この集りは霞ヶ関ビルの三十四階という高いところで行われ、お話が終わるころには夕日が空を真赤に染め、遠く富士山も見えました。「まあきれい！」という私たちに「どす黒い血のような色だ」と、周郷先生は少々辛らつなことをおっしゃいました。でもやはりこの汚染された都心において、気が付かなくなってしまうに、今さらのように気付いたのも、この先生の一言のおかげでした。いつまでもいつまでも、お名残り惜しい気持ちでこの集りをとじました。

(一九七五・二・一三)

赤間 記